

【研究ノート】

井泉水編『一茶俳句集』入集の句 (一)

黄 色 瑞 華

一茶自撰の発句集に、『浅黄空』（久保田ひろ志氏蔵）、『一茶翁自筆句集』（教授院蔵）がある。前者には、寛政五年から文政五年までの句が収めてあるが、春の部のみで、所収句はわずかに五二九句にすぎない。後者は、春・冬の二冊に一〇四四句（重出・抹消を含む）を収め、所収句の成立年代も寛政五年から文政八年に及ぶが、夏・秋の二冊を欠き、所収句の大部分は文化九年以降の成立である。

没後に編まれた発句集に、文政版と嘉永版の『一茶発句集』がある。前者は、文政十二年、俳諧寺社中の撰（上下二冊）、京都・仁龍堂の板行、五二一の発句と、一五の俳諧歌が収めである。後者は、今井墨芳の撰（上下二冊）、江戸の英大助・山城屋佐兵衛、善光寺の蔦屋伴五郎の板行、八二二の発句、一八の俳諧歌が収めである。

文政版には、明治三十六年の再版本（博文館・一茶句集）、名著全集本・一茶叢書本、一茶全集本などがあり、嘉永版にも、嘉永四年の再版本や刊記を欠く別刷本、俳諧文庫本、俳諧叢書本・有朋堂文庫本・一茶全集本などがある。また、大橋裸木編の『一茶俳句全集』（昭4、春秋社）をはじめとして、古典全書・古典文学大系・古典俳文学大系・一茶全集などの発句篇を数えることができる。

これらの一茶発句集の中で、今日最も広く流布しているのは、岩波文庫（30―233―1）荻原井泉水編『一茶俳句集』

である。手もとの一冊には、一九三五年二月一五日第一刷発行、一九五八年一月五日第二刷改版発行、一九八五年五月一〇日第四八刷発行（奥付）とある。一般の読書子・俳句愛好家・学生などが、この一冊から受けた恩恵ははかり知れないものがある。

本書に収めてある一茶の句は、新年の部・九六句、春の部・四七二句、夏の部・四六八句、秋の部・三〇六句、冬の部・四四〇句、雑の部・九句、合計一七九一句である。その内容は、検索の便を配慮して、それぞれ季題分けされ、さらに作年代順に配列されている。

凡例に、「前書（まえがき）は必要と思うものは残しておくが、さもないものは省いた。また文章のあとに句を書き添えたという風のもので、その文章のあまり長いものは省略した。」（凡例四）とあり、実際にそのとおりに編まれている。だが、「年立や雨おちの石凹む迄」の前書「新家賀」、「春立や見古したれど筑波山の前書「両国橋上看ニ紫ノ曙ニ」、上段の代の初日かな旅の家」の前書「今歳称ニ革命ノ年ト、倩四十二年他国送ニ星霜ニ」、春雨や窓から直（値）ぎる芝肴」の前書「武家町」、「笠でするさらばくや薄がすみ」の前書「軽井沢春色」など、一句の解釈上その省略が惜しまれよう。

また、「かなづかいは凡て原本の通りしておく。……」（凡例五）とあるが、「門松や本町すじの夜の雨」は、「本町すぢの」と改められ、「長閑さははや三日月の出ておじやる」は、そのままになっている。送り仮名の異同、漢字と仮名の表記の異同も少なくない（本文に注記した）。

誤植であろうか。次のようなものもある。「元日も立のままなる屑屋哉（文政四年）」とあるが、これは、「文化四年」の誤り、「大江戸や芸なし猿も花の春（文化五年）」とあるが、これは、「文化七年」の誤り、「おのれやれ今や五十年の花の春（文政九年）」は、「文化九年」、「上段の代の初日かな旅の家（文政元年）」は、「文化四年」、「土蔵からすぢかひにさすはつ日哉（文政元年）」は「文政二年」の誤りである。また、「わが春やたどん一つに小菜三把」は「小菜

「把」、「長閑さははや三日月の出ておじやる」は、「長閑や」が正しい。
この句集が最も広く流布している事実と、より正確な資料の提供が研究者の任務であることを併せ考え、以下のノートを公開することにした。なお、利用の便を考え、出典と類句についての注も付しておく。

凡例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは（ ）内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず、元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次に原本のそれを示した。
- 四 ④は、前書の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は主として、一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

新年

元日

於専念精舎

元日やさらに旅宿とおもほへず (寛政七年)

出典 西国紀行 (寛政7・1)
(寛政紀行)

乙卯歳旦

於 専念精舎

今日立春向寺門 々々花開愈清暎

入来親友酌樽酒 豈思是異居古園

元日やさらに旅宿とおもほへず^(え)元日にかわい^(は)や遍路門に立 (寛政——年)

出典 西国紀行(余白書込)

元日にかわい^(は)や遍路門に立

元日も爰らは江戸の田舎かな (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・1)

元日も爰らは江戸の田舎哉

古郷や馬も元日いたす顔 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

家なしも江戸の元日したりけり (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

⑧ 「古郷や」の句より一句前に出。

元日をするや揃ふて小田の雁 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)

元日をするや揃ふ^(う)「て」小田の雁

元日も立のままなる屑屋哉 (文政四年)

出典 八番日記(文化4・10)・発句鈔追加

② 浅黄空・自筆句集・俳諧寺抄録・文政版発句集・嘉永版発句集など、「立のまんまの」。八番日記のこの句の一句前に「元日も別条のなき屑屋哉」。

元日や上々吉の浅黄空 (文政八年真蹟)

出典 浅黄空(前書「元日」)・真蹟

③ 七番日記(文化8・1)「我春も上々吉よ梅の花」。同(文化11・春)「我春も上々吉よけさの春」。

年立

心可と佃島住吉の旭おがみに行く

年立や日の出を前の舟の松 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

あら玉のとし立かへる虱哉 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・1)・発句題叢・浅黄空・自筆本句集・嘉永版発句集・一茶発句鈔追加・発句類題集

年立や雨おちの石凹む迄 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・9)・浅黄空・自筆本句集・俳諧寺抄録・文政版発句集・嘉永版発句集(いずれも前書「新

家賀」)

正月

正月のけしきになるや泥に雪 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

正月や外はか程の御月夜 (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・1)

正月も廿日過けりはをり客 (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・2)

正月も廿日過けりはをり客^(お)

余所並の正月もせぬしだら哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・1)

よ所並の正月もせぬしだら哉

⑨ 志多良・一茶翁終焉記「人並の」、句稿消息「君が代の」。

正月や辻の仏も赤頭巾 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・1)

正月や夜は夜とて梅の月 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・6)・おらが春

⑩ 発句鈔追加「梅の花」。

今朝の春

元旦、肥後八代正教寺にありて

花ぢやぞよ我もけさから卅九 (寛政五年)

出典 浅黄空・自筆本句集・俳諧寺抄録

寛政五年元旦、肥後八代正教寺にありて

花^(ち)じやぞよ我もけさから卅九 (浅黄空)

⑨ 七番日記(文化10)「花じやもの……廿九」。

二つ子にいふ

這へ笑へ二つになるぞけさからは (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)・おらが春・浅黄空・自筆本句集・俳諧寺抄録

二ツ子にいふ

這へ笑へ二ツになるぞけさからは (七番日記)

⑩ おらが春「けさからへ」発句鈔追加「けふからは」。

五十年ぶりで古郷に入

ふしぎ也生れた家でけふの春 (真蹟)

出典 自筆本句集・真蹟

⑪ 浅黄空、前書「四十年ぶりにて古郷に入」、句「ふしぎ也生れた家でけさの春」。俳諧寺抄録、前書「四十

年ぶりにて古郷に入」、句は浅黄空と同形。

あばら家や其身其まま明の春 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)

⑫ 嘉永版発句集、「あばら家の」。

今年からまる儲ぞよけさの春 (文政五年)

出典 未詳

⑬ 八番日記(文政4・1)、前文「去十月十六日、中風に吹掛^(倒)されて、有^(真)に比^(北)の夕の忌みくしき虫となり

しを、此正月一日はつ鶏〔に〕引越(起)されて、とみ〔に〕東山の旭のみがき出せる玉の春を迎(ふ)ひるとは、我身を我めづらしく生れ代りて、ふたゝび此世を歩く心ちなん。句「ことしから丸儲ぞよ娑婆遊び」。梅塵本「八番日記(文政4・1)、前文「去十月十六日、中風に引倒されて、直に北邨の夕の忌みくしき土と成しを、此正月朔日、初鶏に引起されて、とみに東山の旭のみがき出せる玉の春を迎(ふ)ひるとは、我身もめづらしく、生れ替りて、ふたゝび此世に生れて歩行こゝちなんしたりける。」句「ことしから丸(ま)もうけぞよ娑婆遊び」「今年(ま)から丸もうけ遊(ま)びぞ花の娑婆」。文政四年二月五日、斗圍あて書簡、八番日記とほぼ同じ前文を付し、「今年から丸もうけぞよ娑婆遊(ま)び」。発句鈔追加、「これからが」。浅黄空・自筆本句集「ことしからまうけ遊(ま)びぞ日和笠」。

初 春

欠鍋も旭さすなり是も春 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

欠鍋も旭さす也是も春

初春のけ形は我と雀かな (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9)・自筆本句集・発句鈔追加

初春のけ形は我〔と〕雀かな (八番日記)

春 立

春立といふばかりでも草木かな (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

春立といふばかりでも草木哉

春立や四十三年人の飯 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・12)

春立や見古したれど筑波山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)・七番日記・発句題叢・発句鈔追加・希杖本発句集

⑨ 文化句帳、前書「両国橋上看^ル紫^ノ曙^ヲ」。七番日記・前書「空前」。

春立と申すもいかが上野山 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)・嘉永版発句集

春立と申すもいかが上野山(七番日記)

春立や菰もかぶらず五十年 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・1)

⑩ 七番日記(文化9・1)、「先人間の」。

春立や弥太郎改め一茶坊 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4)・八番日記

春立や弥太郎改め一茶坊

⑪ 八番日記(文政2・11)、座五「はいかい寺」。

春立や二軒つなぎの片住居 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・1)

春立や庵の鬼門の一里塚 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・10)・浅黄空・自筆本句集・俳諧寺抄録・発句鈔追加

春立や庵の鬼門の一り塚 (八番日記)

今迄にともかくも成るべき身を不思議にことし六十一の春を迎へるとは、げに／＼盲亀の浮木に逢へるよるこびにまさりなん、されば無能無才もなか／＼齡を延る薬になんありける。

春立や愚の上に又愚にかへる (文政六年)

出典 文政句帳 (文政6・1)・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ 文政句帳、前文「菌原や、そのはらならぬはゝきに、住馴し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしが、巢なし鳥のかなしみはたゞちに埒に迷ひ、その軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ、あるいはおぼつかなき山にまよひ声をかぎりに呼子鳴、答へる松風さへもの淋しく、木葉を敷寝に夢をむすび、又あやしの浜辺にくれは鳥、人も渚の汐風にからき命を拾ひツ、くるしき月日おくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼゆ。折から敷島の道の盛りなる時に、大木の陰たのもしく立よりて、十日廿日の労を休るに至れど、是もお「の」が家にあらねばよきにあしきに心をつかふ物から (以下、井泉水編『句集』に掲げてある文に続く)。

自筆本句集「愚の上を又」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「還曆」。

明の春

武士町やしんかんとして明の春 (文政六年)

出典 文政句帳 (文政6・11)

花の春

大江戸や芸なし猿も花の春 (文化五年)

出典 七番日記 (文化7・1)

大江戸〔や〕芸なし猿も花の春

④ 文化句帳(文化4・2)、「我門や芸なし鳩も春を鳴」。

我庵や菜の二葉より花の春 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

いぬころが鼠とるなり花の春 (文政四年)

出典 未詳

おのれやれ今や五十の花の春 (文政九年)

⑤ 八番日記、「狗が鼠とる也はるの風」(3・10)、「狗が鼠とる也春の雨」(4・2)。

出典 七番日記(文化9・1)・株番

我 春

わが春やたどん一つに小菜三把 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

わが春やタドン一ツに小菜一把

目出度さもちう位也おらが春 (文政二年)

出典 おらが春(文政2・12以降)・発句鈔追加

春来る

御傘めす月から春は来りけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

御傘めす月から春は来たりけり

湯けぶりも月夜の春となりにけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

湯けぶりも月夜の春と成りにけり

初日

上段の代の初日かな旅の家 (文化元年)

出典 文化句帳(文化4・1)

今歳称^ス革命^ト年^ト、^レ情四十二年他国^ニ送^ル星霜^ヲ

上段の代の初日哉旅の家

隠家は昼時分さす初日かな (文政元年)

出典 七番日記(文政1・11)

隠家は昼時分さす初日哉

はつ旭皷も拝まれ給ひけり (文政元年)

出典 七番日記(文政1・11)

はつ旭皷も拝「ま」れ給ひけり

土蔵からすぢかひにさすはつ日哉 (文政元年)

出典 八番日記(文政2・1)

土蔵からす^(ぢ)か^(ひ)いにさすはつ日哉

初空

初空にならんとすらん茶のけぶり (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)

初空へさし出す獅子のあたま哉 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)・我春集・発句題叢・浅黄空・嘉永版発句集・発句鈔追加・希杖本発句集・しきなみ

初空へさし出す獅子の首哉あたま

② 我春集「あたま哉」、浅黄空「頭かな」。

初空の行留りなり上総山 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)

初空の行留り也上総山

初空をはやしこそすれ雀まで (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)

初空をはやしこそすれ雀迄

初空の祝義や雪のちらくくと (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)

初空の祝義(後)や雪のちらくくと

左義長

ちさいのはおれが在所のどんど哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

② 七番日記(13・2)、前書(左)「佐義長」、句「ちさいのはおらが在所の」。

御祝義に雪も降るなりどんどやき (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・2)

御祝義(義)に雪も降也どんどやき

左義長に月は上らせ給ひけり (文政元年)

左義長や其上月の十五日 (文政元年)

出典 (右二句) 七番日記(文政1・2)

藪入

藪入や墓の松風うしろ吹 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・2、3)・文政句帳・文政版発句集・嘉永版発句集・はなの

藪入や泪先立つ人の親 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)

藪入や泪先立(つ)人の親

蓬菜

蓬菜や只三文の御代の松 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

蓬菜に南無南無といふ童かな (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)

蓬菜に南無くといふ童哉

② おらが春・発句題叢・浅黄空・自筆本句集・発句鈔追加「なんむくといふ子哉」。我春集・板本発句題叢・嘉永版発句集「子供かな」。

御降

御降や草の庵のもりはじめ (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)

御降や草の庵ももりはじめ

② 梅塵本八番日記(文政3・1)、「御降や草の庵のもりはじめ」

門松

折てさす是も門松にて候 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)・発句題叢・希杖本句集

③ 板本発句題叢・嘉永版発句集・発句鈔追加、「それも門松」。七番日記(9・1)、「小一尺それも門松にて候」。

から崎や門松からも夜の雨 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・10)

門松や本町すぢの夜の雨 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・2)

門松や本町すぢ(ぢ)の夜の雨

福藁

福わらや十ばかりなる供奴 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)・文政版発句集・嘉永版発句集

水祝

逃しなや水祝はるる五十聿 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

逃しなや水祝るゝ五十聿

初夢

初夢に古郷を見て涙哉 (寛政六年)

出典 寛政句帳(寛政6・1)

弓始

一ぱいにはれきる山や弓始 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

⑧ 前書「彤弓」。

若水

わか水や先は仏のしきみ桶 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・11)

名代にわか水浴る雀かな (文政二年)

出典 七番日記(文政1・11)

庵

名代のわか水浴る雀哉

⑨ おらが春・発句鈔追加「名代に……鳥かな」。八番日記(2・1)、「名代の……鳥かな」。七番日記、この句の一句前に、「名代の寒水浴る雀哉」。

若水や土瓶一つに角田川 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

わか水や土瓶一ツに角田川

羽子

つく羽の落る際也三日の月 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

つく羽の落る際也三ケの月

⑨ 七番日記(文政1・2)、「下ル際也」。発句鈔追加「下りぎはなり」。

年礼

門礼や片側づつは草履道 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・10)

門礼や片側ヅ、は草履道

吉書

小坊主が棒を引ても吉書かな (文政二年)

出典 梅塵本八番日記(文政3・1)

小坊主が棒を引ても吉書哉

⑩ 八番日記(2・12)、下五「吉書始」。梅塵本八番日記、上五を「小坊主が」「子宝が」と両様に記す。八番

日記(4・9)、浅黄空・自筆本句集など「子宝が……吉書哉」。発句鈔追加「子宝や棒をひくのも吉書初」。

手毬

手まり唄一イ一ウ御代の四谷かな (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

手まり唄一ヒ二フ御代の四谷哉

凧

山かげや藪のうしろやいかのぼり (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・12)

山かげや藪のうしろや凧

朔日や一文だこも江戸の空 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・2)

朔日や一文凧も江戸の空

番町や夕飯すぎのいかのぼり (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)・我春集

番町や夕飯過の凧

美しき凧上りけり乞食小屋 (文化八年)

出典 発句題叢(文政3)・文政版発句集・嘉永版発句集

② 七番日記(文化8・1)、「今様の凧上りけり小食小屋」^(左)。我春集「今様の凧の上りし山家哉」。

山寺や翌そる児のいかのぼり (文化十年)

出典 七番日記(文化10・2)・句稿消息・希杖本発句集

山寺や翌そる児の凧

大風のりんとしてある日暮哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・3)

駿河台

日の暮に風の揃ふや町の空 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・閏1)

大名のかすみが関やいかのぼり (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・4)

大名のかすみが関や風

万歳

万歳のまかり出たよ親子連 (文化五年)

出典 文化句帳(文化1・1)

万歳や五三の桐の米ぶくろ (文政元年)

出典 七番日記(文政1・1)

万歳や五三「の」桐の米ぶくろ

② 七番日記、この句の一句前に「万歳や東風にふかるゝ餅袋」。

万歳の通りにしやべる雀かな (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・1)

③ 八番日記(4・12)、「万^(歳)年^(か)のははりにしやべる雀哉」。

大声や廿日過ての御万歳 (文政八年)

出典 七番日記(文化8・1)・我春集・板本発句題叢・嘉永版発句集・発句鈔追加

⑦ 発句題叢、「廿日過て」。

雑煮

君が代や旅にしあれど笥の雑煮 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5・1)

鏡開きの餅祝して居へたるが、未だけぶりの立けるを(註、三男石太郎を悼みし句)
もう一度せめて目をあげ雑煮膳 (文政四年)

出典 真蹟(石太郎を悼む文)

最う一度せめて目を明け雑煮膳

歯固

歯固の歯一枚もなかりけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)

初鶏

初鶏に神代の白と申すべし (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

初鶏に神代の白と申すべし

初鳥

門の木の安房鳥もはつ声ぞ (文化十一年)

出典 句稿消息(文化11・1)

④ 全集本、下五を「又はつ音哉」とする。七番日記(9・6)、「門の木のあはう鳥もはつ音哉」。同(11・1)・句稿消息・発句鈔追加「初声ぞ」。希杖本句集「門先の……初声ぞ」。

若菜

わかなつみわかなつみつみ誰やおもふ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

某も世に有さまのわかなかな (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1)

某も世に有さまのわかな哉

福寿草

帳箱の上に咲けり福寿草 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

⑤ 文政句帳(文政8・2)、「帳面の上に咲けり福寿草」。

神国や草も元日きつと咲く (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・1)

神国や草も元日きつと咲く

七種

七種やとんともいはぬ藪の家 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・1)

春

春めく

春めくや藪ありて雪ありて雪 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・10)・文政句帳(7・2)

⑧ 八番日記(4・2)、「春めくや藪有て雪有て雪」。

春寒

三日月はそるぞ寒さは冴えかへる (文政元年)

出典 七番日記(文政1・1、2)・自筆本句集・文政版発句集

三ヶ月はそるぞ寒〔さ〕は冴〔え〕かへる(七番日記)

彼岸までとは申せども寒かな (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・2)

彼岸迄とは申せども寒哉

春辺

月さして一文橋の春辺哉 (文化八年)

出典 我春集(文化8・1)

長閑

長閑しや雨後の島朝煙 (寛政七年)

出典 西国紀行(寛政7・1)

長閑しや雨後の島の朝煙り

長閑さははや三日月の出ておじやる (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

長閑やはや三ヶ月の出ておじやる^(ち)

土の鍋土の狗の長閑也 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

土の鍋土の狗の長閑^(閑)也

長閑さや浅間のけぶり昼の月 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・1)・嘉永版発句集・発句鈔追加

春の日

春の日や水さへあれば暮残り (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

春の日や暮ても見ゆる東山 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)・文政版発句集・嘉永版発句集

日 永

さりとはは此長い日を田舎哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・2)

ひよい／＼と瘦菜花咲く日永哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・2)

② 七番日記(文化7・2)、「ヒヨロ／＼と礒田の鶴も日永哉」。

永い日や／＼とや元結こく (文化七年)

出典 七番日記(文化7・2)

丸にのの字の壁見へて暮遅き (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

むだ草や汝も伸る日も伸る (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3)

③ 句稿消息「むだ草やあはうに伸る日の伸る」。

山の湯やだぶり／＼と日の長さ (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

山の湯やだぶり／＼と日の長さ

永き日や羽折ながらの坂ふしん (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・2)

としよれば日の永いにも泪かな (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・2)

④ 七番日記(文化13・2)、「老の身は日の永いにも涙かな」。八番日記(3・2)、浅黄空・自筆本句集・嘉永

版発句集「老いぬれば」。

鶏の坐敷を歩く日永哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・1)・浅黄空・自筆本句集
行春

行春の町やかさ売すだれ売 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4・春)

春もはや残りすくなや山の雨 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

松に藤春も暮れぬと夕哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・3)

山守や春の行衛を箒して (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・3)

やよ虱這へく春の行方へ (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ 注 嘉永版発句集、「やよしらみ」。

春の夜

春の夜や一の宝の火吹竹 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・3)

春の雪

古郷や餅につき込春の雪 (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・1)

淡雪や野なら藪なら道者達 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

淡雨〔や〕野なら藪なら道者達

淡雪や藪のいなりの小豆飯 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・1)

⑨ 自筆本句集「赤の飯」。

別れ霜 霜の名残

雁鳴て霜も名残の夜なるべし (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・3)

春雨

忌明の伽に来る日ぞ春の雨 (寛政七年)

出典 西国紀行(寛政7・2)

春雨や何に餅つく丘の家 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

春雨や雀口明く膳の先 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

草山のくりくはれし春の雨 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

草山のくりくはれし春〔の〕雨

春雨やはや灯のとぼる亦打山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

川見ゆる木の間の窓や春の雨 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

春雨やかまくら雀何となく (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・3)

春雨や夜はことくくへの字山 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・12)

春雨や是は我家の夜の松 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)

餅買に箱てうちんや春の雨 (文化八年)

出典 我春集(文化8・1)・嘉永版発句集・九日集

餅買に箱てうちんや春の雨

春雨やてうちん持の小傾城 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

貝殻の山いくつある春の雨 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・3)

一つ舟に馬も乗けり春の雨 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・3)

春雨や鼠のなめる角田川 (文化十年)

出典 句稿消息(文化10・3)^か・文政版発句集・希杖本発句集・嘉永版発句集

梟も面癖直せ春の雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)・浅黄空・自筆本句集

⑧ 七番日記(12・1)・斗圍あて書簡(文化12・2)・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「鳩いけんしていはく」、句「梟よつらくせ直せ春の雨」。句稿消息「梟よ」。

湯けぶりや草のはづれの春の雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

藪といふ藪がそれく春の雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)

春雨や祇園清水東福寺 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

藪尻の賽銭箱や春の雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)・浅黄空・句稿消息・自筆本句集・発句鈔追加

⑨ 浅黄空、前書「隅田堤」。自筆本句集、前書「宿山寺」。

明六を鳩も諷ふや春の雨 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

⑩ 七番日記、この句の一句前に「明六の時を諷ふや春の雨」。

傘さして箱根越す也春の雨 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3、12)・浅黄空・文政版発句集・嘉永版発句集

傘さして箱根越〔す〕也春の雨(七番日記)。

春雨や窓から直ぎる芝肴 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)・浅黄空・自筆本句集

⑨ 七番日記(文政1・12)、前書「武家町」、句「肴肴」。(虎か)

馬までもはたご泊りや春の雨 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2、3)・おらが春。

八番日記・おらが春「馬迄も」。

⑩ 自筆本句集「供馬も」。八番日記(2・閏4)、「馬迄も萌黄の蚊屋に寝たりけり」。

ほんのりと翹の花や春の雨 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)

掃溜の赤元結や春の雨 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)・嘉永版発句集

線香や平内堂の春の雨 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・1)

三介がはつせ詣や春の雨 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・1)

⑪ 「線香や」の二句前に出。

宿引に女も出たり春の雨 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・2)

日歸りの湯治道者や春の雨 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・1)・浅黄空・自筆本句集

⑧ 八番日記(3・6)、中七「湯治もす也」。

菜の煮る湯の涌口や春の雨 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・2)・発句鈔追加

⑨ 八番日記「湯〔の〕涌口や」。発句鈔追加、前書「野沢温泉」。梅塵本八番日記「菜のゆだる」。

山里も銭湯わいて春の雨 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・2)

木々の芽の春雨々と小鳥鳴也 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・4)

木／＼の芽の春雨／＼と小鳥鳴也

⑩ 文政句帳(6・4)、「木々〔の〕めの春さめ／＼と小鳥鳴く也」。

湯桁迄菜を呼込や春の雨 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・2)

浅草真土山に登る、爰に隠れ家茂睡が礎有、かれあく迄閑に住なしたらんは歌のさまにしられて、昔したはしく

庵崎や古きゆふべを春の雨 (花見の記)

出典 花見の記(文化5・3)・発句鈔追加

⑪ 花見の記、この句の前の文は、「心を転じて、浅草真土山に登る。爰に隠れ家茂睡が礎(旁闕。「碑」か)有。

かれあく迄閑に住なしたらんハ、歌のさまにしられて、昔したはしく。『文政句帳』(5・3・20)に、「晴。山下五番阿弥陀参。上野角田川随斎の花見今日也。」、同書の書込みに、「三月二十日花見の記別ニ有。」とある。文化六年句日記(1月)に、「庵崎や古き夕を雉の鳴」。

春風

春風や順礼共がねり供養 (寛政七年)

出典 西国紀行(寛政7・3)

春風や翌行伊駒松原山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

口ばたに春風吹ぬ田舎館 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

春風や黄金花咲むつの山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・3)

春風の国にあやかれおろしや船 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・12)

春風や土人形をゑどる也 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

笠程の窓持て候春の風 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・2)

春風や残らず晴しらかん達 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・2)

春風や東下りの角力取 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・3)

⑩ 文政句帳(8・12)、「春風や東下りの京虱」。

春風や十づつ十の石なごに (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

春風や傾城町の夜の体 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

⑪ 七番日記、「傾城丁」。

春の風いつか出てある昼の月 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

春風や鼠のなめる角田川 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・2)・志多良・句稿消息

春風や地蔵の口の御飯粒。(文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

⑫ 浅黄空、前書「立田」、句「地蔵の膝の赤の飯」。自筆本句集、「地蔵の膝の小豆飯」。

ぼた餅や地蔵のひざも春の風 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

⑬ おらが春・発句鈔追加、「藪の仏も」。希杖本発句集、「辻の仏も」。

春風や夜さりも参る亦打山 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

② 句稿消息、「袂にすれる亦打山」。

春風や畠を掘て涌く油 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・8)・浅黄空・自筆本句集

春風や畠〔を〕掘て涌く油 (七番日記)

③ 自筆本句集、前書「越後」。

春風やしかうしてから柳から (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・2)

春風や八文芝居だんご茶屋 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・1)・浅黄空・自筆本句集

④ 七番日記、「だんご茶や」。

春風や犬の寝聳るわたし舟 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・2)・浅黄空・魚淵あて書簡(文化14・3)

⑤ 自筆本句集、「犬の寝ころぶ」。書簡「犬の寝そべる」。

春風や逢坂越る女講 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・1、2)・浅黄空・自筆本句集

春風や女も越るすずか山 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・1)・浅黄空・自筆本句集

⑦ 七番日記、「すゞか山」。

春風やからりとかわく流し元 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)・浅黄空・自筆本句集

春風や供の娘の小脇差 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・11)・浅黄空・自筆本句集

⑧ 浅黄空・自筆本句集、「供の女の」。

春風のそこ意地寒ししなの山 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・11、4・2)・浅黄空・自筆本句集・斗圍あて書簡(文政4・2)

⑨ 発句鈔追加、「そこ意地寒き」。

春風や越後下りの本願寺 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・閏1)

春風や三人乗りのもどり馬 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・3)

⑩ 文政句帳、「一馬に三人乗りや春の風」。

東風

東風吹や堤に乗たる犬の腮 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・8)

東吹やこちへくと女坂 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・2)

⑨ 文政句帳(6・2)、「春風や武士も吹るゝ女坂」「東〔風〕の吹く形になぞへや女坂」「こちへこちとや東風の吹女坂」。

春の月

浅川や鍋すすぐ手も春の月 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・2)

寺山や春の月夜の連歌道 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・1)

御門主の籠松明や春の月 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・3)

ついそこの二文渡しや春の月 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)・株番・文政版発句集

すっぽんも時や作らん春の月 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)・おらが春・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・李園あて書簡(文政2・2)

スツポンも時や作らん春の月(七番日記)

⑩ おらが春・文政版発句集、李園あて書簡(文政2・2)、前書「水江春色」。浅黄空、前書「大沼春色」。自筆本句集、前書「椿所不踰矩」。

朧

白魚舟一つへりてもおぼろ也 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

おぼろ夜や餅腹こなす東山 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・1)

木の端のおれが立ても臙也 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・3)

⑩ 七番日記(10・2)、「むさしのおれが立ても臙也」。

白日登湯台

三文がかすみ見にけり遠目鏡 (寛政四年)

出典 霞の碑(寛政2)・寛政句帳(寛政4・春)

⑪ 霞の碑、前書なし、「霞見にけり」。

京見えて臙をもむ也春がすみ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

⑫ 享和句帳、前書「明夷」。同句帳(3・10)、前書「汝墳」、句「京見えて一汗入る木陰哉」。

かすみ日や夕山かけの飴の笛 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)・発句題叢・発句鈔追加・希杖本発句集・嘉永版発句集

⑬ 自筆本句集上五「霞けり」。七番日記(文化12・12)、「(飴の誤りか) 笛の飯」。

春がすみ鎌とらぬ身のもつたいな (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・2)

湖を風呂にわかして夕がすみ (文化八年)

出典 七番日記(文化8・3)

古椀がはやかすみむぞよ角田川 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・1)

かすみ日やさぞ天人の御退屈 (文化九年)

出典 株番(文化9・2)・文政版発句集・嘉永版発句集

⑨ 株番、前書「天上」。文政版発句集・前書「天上」。嘉永版発句集、前書「天上」、句「霞日や」。

ほくくとかすみ給ふはどなた哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・2)・志多良

⑩ 浅黄空、前書「窓前」、句「ほくくとかすんで来るほどなた哉」。句稿消息・希杖本発句集・素檠あて書簡(文化10・春)、「霞んで来るは」。

我里はどうかすんでもいびつなり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)・句稿消息

⑪ 七番日記、「いびつ也」。句稿消息、「我郷は……いびつ也」。七番日記(10・1)、「古郷やイビツナ家も一かすみ」。

笠でするさらばくや薄がすみ (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・2)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

⑫ 七番日記、前書「軽井沢春色」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「軽井沢」。

梅ばちの大桃灯やかすみから (文政元年)

出典 八番日記(文政1・3)

⑬ 前書「加賀守」。

白壁のそしられつつもかすみけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)・おらが春・李園あて書簡(文政2・2)

② 八番日記、前書「上野」。おらが春、前書「上野遠望」、句「誹れながら」。書簡、前書「上野遠望」、句「そしられながら」。梅塵本八番日記、前書「上野」、句「そしられッ、も霞かな」。八番日記(文政2・3)、前書「上野」、句「白壁のひいきしてゐるかすみ哉」。

横乗の馬のつづくや夕がすみ (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)・発句鈔追加・嘉永版発句集

② 八番日記(2・3)、「横のりの馬のつづくや夕雲雀」。おらが春、「横乗の馬のつづくや夕雲雀」。かすみけりにくいやど屋も迹の村 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・3)・自筆本句集・嘉永版発句集

② 自筆本句集、前書「旅」。浅黄空、前書「旅」、句「かすみけり悪い宿屋も」。嘉永版発句集、「霞けり」。迹供は霞引けり加賀の守 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・3)

② 浅黄空、「迹供はかすみのおくや」。自筆本句集、「かすみかゝるや」。

かすむ日や宗判押しに三里程 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・2)

かすむ日や宗判〔押し〕に三里程

② 梅塵本八番日記、「霞日や宗判押しに三里ほど」。

古郷やあれ霞あれ雪が降る (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・2)

陽炎

かげろふに任せておくや餌すりこ木 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・1)

陽炎や浅茅原を薄草履 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・2)

陽炎や菅田も水の行とどく (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・2)

陽炎や道灌どのの物見塚 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)・我春集

陽炎〔や〕道灌どのの物見塚 (七番日記)

② 我春集、前書「正月廿九日、於本行寺会」。

陽炎や臼の中からま一すぢ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・1)・志多良・句稿消息・文政版発句集・希杖本発句集・嘉永版発句集

② 七番日記、「ま一すぢ」^(ち)。志多良・句稿消息・文政版発句集など「ま一筋」。

陽炎や土の姉さま土僧都 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・春)・句稿消息・希杖本発句集

② 句稿消息、「土僧都」^(都)。

陽炎や切欠てうるしなの山 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・1)

② 浅黄空・自筆本句集、「切欠て売る砥石山」。

陽炎や狐の穴の赤の飯 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・1)

陽炎や笠へそりおとす月代に (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・2)

陽炎や新吉原の昼の体 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3、12)・だん袋・浅黄空・自筆本句集・発句鈔追加・希杖本発句集

陽炎や歩行ながらの御法談 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)・八番日記(文政2・1)・浅黄空・文政版発句集・嘉永版発句集

③ 七番日記、前書「題橋元町聖人」。浅黄空、前書「橋本町住僧」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「橋本町上人」。

陽炎やけふ一日の御成橋 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

陽炎や手に下駄はいて善光寺 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・3)・嘉永版発句集・希杖本発句集

④ 梅塵本八番日記、前書「居去」。

九十六日のおひだ、雪のしらじらしき寒さに逢ひて此世の暖さをしらず仕廻ひしことのいたいたしく、せめて今ごろまでも居たらんには

(三男石太郎を悼みし句にして、「赤い花こころくときぞかしの」と連作なり)

陽炎や目につきまとふ笑ひ顔 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・1)・斗圍あて書簡(文政4・1)

⑧ 七番日記、「笑ひ顔」⁽⁵⁾。書簡、前書「みどり子の二七日の暮」。

陽炎の立や垣根の茶ん袋 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・2)

陽炎やそば屋が前の箸の山 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・5、7・1)・文政版発句集・梅塵抄録一茶連句集